



# お馬の 親子



川崎ゆきお

「これはどうなんでしょう」

「何かありましたか」

「判断が難しい事象ってあるでしょ」

「難しい話ですか」

「単純で分かりやすい話なのですが、それをどう判断するかの方が難しいのです」

「話してみてください」

「はい、路地です」

「路地」

「住宅地の路地です。建て売りの分譲住宅です。結構大きな区画です。もうできてから十年以上なりますから、町にも馴染んでいます。建物はほぼ十年前と同じです。変わったのは人ぐらいですかねえ。産まれた子供は十歳になっています」

「本題を」

「はい。その路地なんです」

「そこで何かあったのですか」

「メイン通りが一本貫き、その左右に枝道が何本か延びていますが、すべて行き止まりです。当然、それらの道は私道です」

「では、路地は私有地で、抜けられないと」

「はい」

「権利問題ですか」

「違います」

「本題を」

「はい。お馬の親子です」

「はあ。かなり飛びますが」

「親子ではなく、お爺さんと孫でしょうねえ」

「はい」

「夜中に、パカパカ」

「はあ」

「正しくはパッコンパッコンとかカランコロンとか」

「難しい話ですねえ」

「分かりやすい話ですよ」

「何ですか、その音は」

「缶詰です」

「また、飛びますねえ」

「缶詰に二つ穴を開けて、長い紐を通し、それに乗ります」

「ああ、私も子供の頃やりましたよ」

「お爺さんはパイナップルの長い缶です。お孫さんは普通の缶です。最近もっと薄いのがありますが、それじゃありません」

「それに長い紐を通し、手で引っ張りながら、竹馬のようにして歩くんでしょ」

「そうです。そして、お爺さんが、お馬の親子は仲良しこよしって歌うんです」

「孫のお守りでしょ」

「お守りですが、夜中です」

「ほう」

「その路地の端から端まで、お馬の親子です。行ったり来たり」

「はい」

「はいじゃないでしょ。おかしいでしょ。夜中ですよ。孫は男の子で幼稚園程度。お爺さんの後ろから、それこそ子馬のようについて行きます。そして、孫も小さいながら、お馬の親子を歌っています。そして、合いの手のように、その缶詰でパッカンパッカンとか、パクンとかパンパンとか鳴らすんです。うるさいですよ。結構」

「微笑ましいじゃないですか」

「お爺さんのズボンの後ろ、お尻ですね。ベルトから紐をたらしています。馬の尻尾ですよ。そこまでやりますか」

「孫は」

「孫もズボンから何か垂らしています。よく見るとトイレットペーパーです」

「あの缶は、竹馬と同等でしょ」

「そうですねえ」

「どちらも高くなるので、バランスが大変だ」

「そういう話じゃないでしょ。異常です」

「微笑ましい光景じゃないですか」

「しかし、夜中、そんな缶詰に乗って、ひずめのような音を立てながら、お馬の親子の歌を歌い、路地を何往復もする。これ、違うでしょ。普通と」

「私も孫ができたならやってみたい」

「それでいいのですか。あの現場を見れば、判断に迷いますよ」

「孫と遊んでいるお爺さん、それでいいじゃないですか」

判断が分かれたようだ。

了